

# パニッツィと ブリティッシュ・ミュージアム図書館

—蔵書目録刊行中止とその背景をめぐって—

熊田 淳 美  
安江 明 夫

はじめに

- 1 パニッツィの経歴
- 2 19世紀中期の社会とBM
- 3 分類目録か著者名目録か
- 4 著者名目録の刊行と中止

5 目録刊行中止の意味

- 6 パニッツィ勝利の政治的背景
- むすび  
資料・1—3

## はじめに

当国立国会図書館図書館学資料室に、赤表紙、フォリオ判、約500ページの1冊の冊子目録が保存されている。1841年発行のブリティッシュ・ミュージアム(British Museum 以下「BM」と略称)図書館所蔵の活字本図書(printed books 以下「刊本」とする)の著者名のアルファベット排列による目録(alphabetical catalogue)の第1巻である<sup>①</sup>。1962年、神田の古本屋からようやく入手しえた日本で唯一のものだという。

しかも、この目録は第1巻すなわちAの部が刊行されただけで、以後の刊行は打切られたものだともいう。編者はアントニオ・パニッツィ(Antonio Panizzi, 1797~1879)。文字通り稀観本ともいうべきだろう。この目録が、目録の本体と、91条に及ぶ目録規則だけを内容としていたならば、目録の理論や歴史にまったく不案内な筆者は、その珍しさを感じするだけに終わったか

もしれない。

ところが、わずかに18行の簡単な序文(本稿「資料・1」参照)を読んで驚いた。パニッツィの名によるその序文は、何とも無愛想で味気なく、蔵書目録の編纂という大事業を前にした意気込みも抱負も語られていなかった。むしろ編者の投げやりな気持ちさえ感じられた。そして、巻末の付録を読み進むにつれて、それが単なる思い過ごしではないことを知った。パニッツィはこの目録の刊行にまったく消極的だったのだ。

それにしても、85ページに及ぶ付録のうちこの部分(本稿「資料・2—3」)は、BMの最高政策決定機関である理事会(Trustees)に対するBM刊本部長(Keeper of Printed Books)パニッツィの脅迫にも近い抗弁の書ではないか。政策決定の内情まで明らかになるような書簡が、当の目録に何故つけ加えられねばならなかったのか。それに、この第1巻の刊行が1841年であるはずなのに、これらの文書が1843年、

1844年の日付であったりするのは何とも不可解である。パニッツィは何故に目録の印刷に反対するのか。逆に、理事会は何故に印刷を強要しようとするのか。いったい、理事会とパニッツィのいずれが当時の世論を反映していたのか。

BM第2の祖、近代図書館発展の祖ともいわれ、現在の目録法の基礎をつくった当のパニッツィが、何故みずからの規則に従って目録の刊行を完成するという名誉を拒否することになったのか。これらの疑問は広がるばかりであった。

これらの疑問は、この問題の起った激動の19世紀中期のイギリス社会の大きな流れ、特に文化・思想の動きのなかでとらえるのでなければ解決は困難なのではないか。そしてむしろ、この1冊の目録が含むさまざまな問題を手がかりにすれば、当時の社会とBMとのつながりに何らかの光があてられるのではないかと考えた。本稿は、BM図書館を歴史の流れのなかでとらえる、あるいは歴史を通して図書館をとらえようとするひとつの試みである。

なお、本稿は「本文」を熊田が、「資料」の翻訳を安江が担当した。

#### 注

- (1) *Catalogue of printed books in the British Museum*. Vol. 1. London, printed by order of the Trustees. 1841.

### 1 パニッツィの経歴

現BM図書館の熟達した利用者である日本のさる高名な経済学者は、パニッツィを「イタリア人建築家」としている<sup>(1)</sup>。たしかにあのドゥム型の大閲覧室は、パニッツィの構想と監督のもとに、1857年に完成し

たものだが、パニッツィ自身は建築家でも、芸術家でもなかった。図書館界ですら、その名がしばしば口にされることはあっても、パニッツィ自身の経歴に立入って紹介したものは極めて少ない<sup>(2)</sup>。以下、彼のBM入りまでの期間を中心に、必要最少限の経歴を年譜的に紹介しておこう<sup>(3)</sup>。

パニッツィは1797年9月16日、イタリアのモデナ公国の小都市ブレッシェロ(Bresscello)に薬剤師の子として生まれた。1814年パルマ大学に入学。ナポレオン帝国下でイタリア王国に属していたモデナは、ナポレオンの敗北で独立を回復するが、続くヴェイン体制の下でオーストリア帝国ハプスブルク家の支配を受ける。在学中のパニッツィがイタリア統一と独立を目ざすカルボナリ党系の政治結社に加入したのはそのためであった。1818年法律学の学位をえて帰郷し、弁護士を開業。翌年から市の行政官を兼任。1820年ごろイタリア各地に叛乱が発生し、モデナ公国でも、政治活動に対する取締りが強化され、政治結社の一員であるということのみで処刑の対象とされるようになった。1822年10月、パニッツィは逮捕の危険を感じて、スイスのジュネーブに脱出。翌23年5月、ロンドンに渡った。当時のロンドンは、ヨーロッパ各地からの亡命者で溢れていた。そこには、おのずから出身国を同じくする亡命者の集団が形成されていた。イタリア人の集団のなかに亡命詩人フォスコロ(Ugo Foscolo)やイギリスの詩人キャムベル(T. Campbell)がいた。彼らの紹介をえて、8月リヴァプूलに移る。10月23日、モデナの法廷は被告不在のまま死刑を宣告。リヴァプूलでは、先ずイタリア史、イタリア文学の研究者ロスコウ(W. Roscoe)の知遇をえた。リヴァプूल時代のパニッツィはイタリア語の家庭

教師をして生活の資とした。当時のイギリス上流社会の婦人の間には、イタリア文学が流行していたのだった。その故にか、この間、パニッツィはルネサンス期のイタリア文学の研究に熱中した。

ロスコウの仲間に、有名なホイッグ議員のブルーム(Henry Peter Brougham)がいた。弁護士でもあるブルームは、パニッツィの大陸法に関する知識に興味を抱き、親しく交わるようになる。新設のロンドン大学理事長としてのブルームの推せんで、28年同大学のイタリア語・イタリア文学の教授となる。しかし受講者の数少なく、生活は不安定であった。しかし、この間、パニッツィとしては唯一の学問的成果となったイタリア・ルネサンス期の詩人アリオスト(Ariosto)、ボヤルド(Boiardo)の詩の校訂と研究に着手<sup>(4)</sup>。1830年、ホイッグのグレイ内閣の成立で、ブルームは大法官(Lord Chancellor)に就任するや、自動的に上院議長とBM理事長団(理事長団は、上・下両院議長、カンタベリ大司教の3名より成る)の1人となり、パニッツィのBM入りを推挙。かくてパニッツィは、1831年4月25日、カンタベリ大司教の承認をえてBM職員の1人となり、その飽くなき情熱と愛情をBMに注ぐことになった。入館時の地位は、特別次長代理司書官(Extra Assistant Librarian)<sup>(5)</sup>であった。

パニッツィ入館の経緯について、カンタベリ大司教はこう語っている。「パニッツィ氏の名声は聞いておりましたが、そのこと以外、私にとりまして全く未知の人でありました。私は氏がイタリア出身の市民であり、広い知識と能力を備えられた、BMに特に適した人物であることを了解いたしました。このことをBM理事の何人かの方が強く力説されたのであります」<sup>(6)</sup>と。



フェイガンが描いた69歳当時のパニッツィ像(本節注③④より転載)

翌32年3月イギリスに帰化。1837年7月19日、バババ(Baber)の後任として刊本部長(Keeper of Printed Books)に就任。以後19年の長きにわたって多彩な活動を展開する。ついで1856年3月15日、エリス(Ellis)の後任としてBM館長に就任。1866年7月16日、健康上の理由で辞任。1879年4月8日、波瀾に富んだ81年の生涯を、その伝記を書くことになるフェイガン(Louis Fagan)の腕に抱かれて、静かに閉じた。生涯独身であった。

BM時代のパニッツィが残した大きな業績は図書館業務のあらゆる面に及んでおり、その個々の経過については稿を改めねばならないが、その主なものは、(1)著作権法の強力な施行。(2)図書購入費の飛躍的増大。これら2つの努力によってBMの蔵書数は著しく充実することになる。(3)91ヵ条目録規則の制定。(4)現BM図書館大閲覧室の計画作成とその実現。(5)BM職員の地位向上、等々。

これらすべての事業は、かれみずからが最も強調したように、BM図書館を調査・研究のための「国民の図書館 (National library)」とするという大きな構想のもとに行なわれたのであった。

パニッツィはこうしてBM図書館の充実と近代化に努めるかたわら、イタリア統一のためにもその政治力と実行力を注ぎ続けた。イタリアをめぐる英仏間の微妙な関係の中に立って、事実上、イタリア代表の民間外交官としての役割をも果たした。

パニッツィは明白に2つの顔をもっていた。ひとつは、最もイギリス的な顔、他のひとつは、最もイタリア的な顔であった。

## 注

- (1) 杉山忠平『イギリスの国・イギリスの人』(1967)のうち「ブリティッシュ・ミュージアム図書館」pp. 68-114. 特にp.98.
- (2) たとえば①川口鉄男「アントニオ・パニツィ卿の功績について」『図書館学』第4号(1956) pp. 13-17. ② 簾治良左衛門「アンソニオ・パニツィー近代図書館建設の始祖」『図書館界』10巻3号(1958) pp. 65-71.
- (3) 以下のパニッツィの経歴の記述は次のものを用いた。① Fagan, L. *The life of Sir Anthony Panizzi, K.C.B.* 2 vols. 1880 ② Miller, E. *Prince of librarians: the life and times of Antonio Panizzi of the British Museum.* 1967.
- (4) Panizzi, A. ed., *Orlando Innamorato di Bojardo. Orlando Furioso di Ariosto.* 8 vols. 1830-1834.
- (5) 当時のBMは、館長(Principal Librarian) 理事会事務局長 (Secretary) 以下、刊本部、稿本部 (Dept. of MSS) など7部に、部長 (Keeper) 副部長 (Assistant-Keeper) 副部長代理 (Assistant) 補佐員 (Attendant) その他の職員、臨時職員が配置されていた。理

事会はBMの政策、運営の最高決定機関で48名から成り、その内訳は、国王任命1、職権上理事 (Official T.)23、寄贈家代表 (Family T.)9、これらの理事によって選ばれる選出理事 (Elected T.)15であった。

- (6) *Report from the Select Committee on the Condition, Management and Affairs of the British Museum with minutes of evidence.* 1836 (in *British parliamentary papers. Education. British Museum.* 2. Irish University Press. 1968) (以下 Select. Comm. 1835 or 1836と略す) Question no. (以下 q.と略す) 5511.

## 2 19世紀中期の社会とBM

19世紀初めのBMは、ロンドンの一般市民にとって、図書館としてよりは、文字通り博物館であった。その内部には、古代の美術品、得体の知れない科学標本、稿本、稀観本などが雑然と集められていた。まして刊本部などは、多くの人にとって最も縁の薄い存在であった<sup>(1)</sup>。図書館の入館許可証発行数は1810年でわずか112人<sup>(2)</sup>、のべ入館者数2,000人<sup>(3)</sup>であった。また、1753年の創立以来、寄贈によるもののほか、組織だった刊本の収集もほとんど行なわれていなかったし、上級職員の多くは聖職者・医者・文筆業を兼ねている上に、高齢化もしていた<sup>(4)</sup>。

こうしたBM図書館の停滞的な空気の中に、1823年、故ジョージ三世のコレクションがジョージ四世によって寄贈され、刊本の蔵書数は一挙に倍増して約24万冊となった。1828年の新館の開室と共に、その閲覧が可能になると<sup>(5)</sup>、閲覧者は急増し、1830年には1810年の約15倍1,755人が入館許可証をもち<sup>(2)</sup>、延人数は31,200人に達した<sup>(3)</sup>。パニッツィが入館した1831年ころは、こう

してようやくBMに対する関心が高まろうとしている時であった。

しかし、その関心の高まりは、BMの施設・内容が改善の方向にあったという理由からだけではない。むしろ、より一般的、より社会的な要請がBMをも含むさまざまな諸制度に対する改善を要求していたからである。同時代のフランスの批評家トクヴィル(A. de Tocqueville)は、30年代イギリスの社会をみて、「あらゆる階層に改革の精神が広がっている。それは現状に対する不満と過去に対する嫌悪の精神である。良いものを保持することよりも、悪しきものを正そうとすることに熱中している」<sup>(6)</sup>と指摘したが、早晩、BMにこの改革の順番がまわってくることは明白であった。

トクヴィルのいうこの時期の改革の精神とは具体的に何を指すのであろうか。それは功利主義の思想、自由主義の思想であった。ベンサム(Jeremy Bentham)、ミル(James Mill)などの功利主義の理論は、産業革命の進行によって数を増した産業資本家＝ブルジョワジによる自由主義の理念に照応しつつ、さまざまな変化を受けながら、19世紀20年代から、60年代にわたって、イギリスの政治・経済・社会・文化に大きな影響を与えることになる。ダイセイによれば、30年ごろ、功利主義はすでに「あまねく広まって」いたのである<sup>(7)</sup>。そして功利主義の強味は、それがイギリス人の伝統的な思想や感情と相通じ合う「常識」でもあったということである。それは諸制度の改革や改良を求めても、社会組織の基盤を揺り動かすものとはならなかった<sup>(8)</sup>。この思想を体現し、指導した政治家たち、ラッセル(J. Russell)、ブルーム、マコウリ(T.B. Macaulay)らのホイッグ派の政治家、ピール(R. Peel)、カニング(G. Canning)ら

トリー派の政治家が、まさにこの意味の常識的功利主義者であった<sup>(9)</sup>。パニッツィと親交をもち、かれのBM入りを推せんしたブルームは、その中でも最も急進的な1人であったが、それ故にかえって、次第に一般市民とも、パニッツィとも疎縁になってゆく<sup>(10)</sup>。いずれにせよ、32年の選挙法改正、35年の都市自治法(Municipal Corporation Act)を初め一連の法改革がかれらの指導の下に行なわれて行く。特に選挙法改正と都市自治法ほど「過去との華々しい絶縁」<sup>(11)</sup>を示したものはなかった。

功利主義者たちの関心は、直接効果のある政治・経済の分野に止まらなかった。ブルームは、産業革命によってその数を増した労働者、特に熟練労働者教育にも大きな関心を払っていた。1825年かれは「有益知識普及協会」(Society for the diffusion of useful knowledge)を結成する<sup>(12)</sup>。ブルームらにとって「有益な知識」とは、生産をより安価に、より効果的に、より速く行なうための知識であり、それは取りも直さず功利主義の政治学・経済学と原理を共有するものであった。この原理を展開して行くならば、国民は将来にわたって政治的・経済的な混乱に陥ることはありえないと考えた<sup>(13)</sup>。この世界観は、機械と交通機関の発達、特に1825年の鉄道開通を契機として一層促進された産業革命と機械文明のなかに、社会の進歩を信じたのである<sup>(14)</sup>。

ホイッグの議員で歴史家のマコウリは、その『英国史』の中で、「自然に対する知識の絶えざる進歩と人々の努力が、国民を繁栄させるのに作用している。進歩は19世紀に加速度的に進んでいる。……大陸のあらゆる部分が流血と荒蕪の戦争の舞台であった時、この国には相敵する場面はみられなかった」<sup>(15)</sup>という。こうした進歩の思想

に貫かれた『英国史』第1,2巻のぼう大な歴史書が、1848年から49年にかけて、約22,000部も売れたということは、43年のディケンズの『クリスマス・カール』1年間の販売数が15,000部であったことと比較するならば<sup>(16)</sup>、当時の一般の思潮がいかに「常識としての功利主義」を共有していたかをよく物語っている。

こうした科学と技術の進歩に対する信仰は、1851年のロンドン万国博覧会となつて、ひとつの頂点を形成する。鉄とガラスで構築された水晶宮に殺到した見物客の数は1日に約10万人、会期中600万人に達した<sup>(17)</sup>。この時ロンドンの人口は約250万人だった<sup>(18)</sup>。48年にすでに全長約5,000マイルに達した鉄道<sup>(19)</sup>がこれを可能にした。大衆は温和しく、驚くほど秩序的であったという<sup>(17)</sup>。1848年に大陸に続発した革命はイギリスには起こらなかった。万国博はさまざまな意味でヴィクトリアン・イングランド(Victorian England)の象徴的な出来事であった。

ナポレオン戦争の終結から60年代に至るイギリスは、まさに「改革の時代」<sup>(20)</sup>「改

良の時代」<sup>(21)</sup>であった。

もちろん、この時代には経済的繁栄と実用科学の分配に与かりえない多くの貧困な未熟練労働者の一団のあったことは事実として存在する。しかし、かれら自身の要求も、かれらに対する同情と救済の声も未だ世論を形成するに至っていないかった。社会は自らの内に抱くさまざまな矛盾に十分気付いていなかった。芸術や文学の世界はロマンティズムの最盛期を迎え、宗教界にはオクスフォード運動(Oxford Movement)が進行していたが、それはまさにこうした社会思潮に対する裏返しの面だったのである。

では、こうしたBMの外の文化状況と、BM図書館との接点は何であったろう。30年代のBM閲覧室の扉の中を少し覗いてみることにしよう。ここにひとつの統計がある。1835年3月1日から5月31日に至る3ヵ月間の出納図書の実態である<sup>(22)</sup>。この統計のみをもって速断するのは危険であるが、科学分野のものが圧倒的に多い。このころ、多くの科学者の間には、BM図書館蔵書の分類目録の完成を期待する声が高ま

### 出納閲覧図書の实態統計

1835年3月1日～1835年5月31日 (除. 備付レファレンス・ブック)

単位:タイトル数 (冊数ではこの数字の約4倍)

神学	1,190	法律	945	小説	495
古典	763	系図	153	評論雑誌・雑誌	870
科学	2,713	地誌	1,286	その他	1,725
美術	624	旅行・航海	797		
歴史	2,167	百科事典, 辞書, 文法など	421	計	16,524
考古学	481	詩, 演劇	1,187		

っていたし<sup>(23)</sup>、47年3月には多数の指導的学者が首相に陳情書を送り、BMの運営に関する一大抗議を行なった<sup>(24)</sup>。当時のBM図書館にかなりの学者の利用があり、その関心はかなりの行動力をもって示されていたということができよう。このことは、時代の風潮が学者の地位と役割を押し上げていたことと照応している。

しかし、科学書がBMで最も多く読まれている事実は、必ずしも学者自身の利用になるとは限らない。BM閲覧室の常連で評論家・歴史家のカアライル (Thomas Carlyle) は証言する。「閲覧室の利用者はさまざまですが、多くの綿密な知識を伴う研究を行なっているものは多数ではありません。多くの閲覧者が、小説を読むために来館しております。全体として、大部分は編纂と抜粋を行なうことを目的として居ります。これは、かれらが百科事典や雑誌、伝記事典その他の編纂物の記事にするためのものと思われまふ」<sup>(25)</sup>。小説を読む者が多いということはパニッツィによって否定されるし<sup>(26)</sup>、先の調査結果に照らしても誇張であることは明らかである。むしろ小説を読む者が目立つほど、かたい内容の図書が利用されていたということであろう。しかし編纂物作成を目的とする者が多いというのはどういふことだろう。

ブルームの「有益知識普及協会」の出版物を引受けていた出版業者チャールス・ナイト (Charles Knight) の編になる『1銭百科』(Penny Cyclopaedia)という小百科事典があった。これは実用知識を普及するために、33年から44年にかけて29分冊で出版され、当初は75,000部を売ったベスト・セラアズの一つであった<sup>(27)</sup>。当時の大人の読み書き能力が男子67%、女子で51%<sup>(28)</sup>に止まっていたことを考えれば、これは大

変な普及度をもっていたことになる。こうした実用書が多く読まれたこともまた、この時代の社会事情をよく物語っているが、その編纂の題材こそ、編者のナイト自身が語っているように、BM図書館の図書から引出したものであった<sup>(29)</sup>。しかも、この小百科事典が実用的利用を目的とした以上、科学や伝記ものが主な項目を占めたであろう<sup>(30)</sup>。そしてこのようなBM図書館の利用のされ方は、ひとりナイトに限らなかったと想像される。

いずれにせよ、先の図書利用状況調査に現われた科学書の利用状況の多さは、確かにBMの外の文化状況をかなり正確に反映していたのであるし、またそのように利用されることが多かったと言うことができよう<sup>(31)</sup>。

してみれば、1830年代のBM図書館に改革の波が押し寄せてくるのは、単に順番がまわってきたというだけのことではあるまい。むしろ、BM図書館を時代の要求に適応化させていこうとする、より積極的な動機によったのではあるまいか。

#### 注

- (1) Miller, op. cit., p. 83.
- (2) *Report of the Commissioners on the Constitution and Government of the British Museum with minutes of evidence and index. 1850*(in *British parliamentary papers. Education. British Museum. 3.*, Irish University Press. 1969)(以下 Royal Comm.と略す) Question no. (以下 q.と略す) 4328.
- (3) Esdaile, A. *The British Museum Library. 1946. p. 79* (以下 Esdaile, B.M.と略)
- (4) Miller, op. cit., p.93. 刊本部長ベッパは牧師。稿本部長兼理事会事務局長フォォンシャルは病院附属礼拝堂付牧師。1837年には36

- 年の下院特別委員会の決定に基づいて、職員  
の待遇改善を行なう代りに「報酬を伴うか、  
義務を伴うか他の如何なる地位につくことを  
禁」ずるに至り(cit. in Ibid., p.122), パエバ  
は退職し、パニッツィが刊本部長となる。
- (5) Esdaile, A. *National libraries of the world*. 2nd ed., 1957. pp. 3-4.
- (6) Tocqueville, A. de., *Voyage en Angleterre*. cit. in Miller, op. cit., p. 123.
- (7) Dicey, A.V. *Law and public opinion in England during the nineteenth century*. 2nd ed., 1914, 1963. p. 173.
- (8) Ibid., p. 174.
- (9) Ibid., p. 177.
- (10) Miller, op. cit., p. 75.
- (11) T. F. T. ブラックネット著 イギリス法研究会訳『イギリス法制史・総説篇・上』1959. p. 138.
- (12) *Dictionary of national biography*. (以下D.N.B) vol. VI. pp. 445-458.
- (13) Altick, R.D. *The English common reader*. 1957. pp. 130-131, 189.
- (14) Brougham, H. *Address to the members of the Manchester Mechanics' Institute* 1838. cit. in Altick, op. cit., p. 189.
- (15) Macaulay, T.B. *History of England*. Vol. 1, 1848, 1953 (Everyman's Lib. ed.) pp. 210-211.
- (16) Altick, op. cit., p. 383.
- (17) Beales, D. *From Castlereagh to Gladstone, 1815-1885*. 1969. p. 208.
- (18) Mitchell, B.R. *Abstract of British historical statistics*. 1962. p. 20
- (19) Ibid., p. 225.
- (20) Woodward, E.L. *The age of reform 1815-1870*. 1938.
- (21) Briggs, A. *The age of improvement 1784-1867*. 1959.
- (22) Select Comm. 1835. App. 22. pp. 429-430 この種の調査は一回きりで、以後行なわ

れたかったらしく、後の王立委員会でのパニ  
ツィ証言もこの調査に基づいている(Royal  
Comm. q. 4928)。

- (23) Miller, op. cit., p. 109.
- (24) Esdaile, B.M. p. 113.
- (25) Royal Comm. q. 4396.
- (26) Royal Comm. q. 9378.
- (27) Altick, op. cit., p. 390.
- (28) 1840年の結婚登録記載可能者を対象とする  
全国的調査。Ibid., p.170,
- (29) Knight, C. *Passage of a working life*.  
cit. in Altick, op. cit., p. 272.
- (30) Cf. *Encyclopaedia Britannica*. 1947.  
Vol. 8. p. 431.
- (31) もちろん、パニッツィが指摘するように、閱  
覧者実数の多くは、学術研究を目的とする学  
徒だったであろう(Royal Comm. q. 4298)。  
ここで指摘したいのは、それまでの図書館に  
なかった新しい利用傾向が見出されるよう  
になったということである。

### 3 分類目録か著者名目録か

BMに対して初めて、公式かつ組織的な  
関心が向けられたのは、1835年5月から始  
まった「BMの現状・管理・諸問題に関する  
下院特別委員会(Select Committee on the  
Condition, Management and Affairs of  
the British Museum以下、特別委員会)」  
においてであった。この委員会の設置は、  
勤務成績不良を理由として解雇されたBM  
稿本部(Dept. of MSS)の臨時職員ミラ  
ッドが、ホウズ(B. Hawes)なる下院議員に  
提訴したことに端を発した<sup>(1)</sup>。しかし委員  
会はミラッド問題を審議するどころか、委  
員会の名称そのものが示すように、もっぱ  
らBM全体の諸問題を調査することになっ  
た。この委員会は35年中に十分な調査をし  
えないまま、翌年も引続いて開かれること



になる。委員会の関心は、全体として、博物部 (Depts. of Natural History) に向けられ、図書館に対するものは必ずしも十分ではなかったが<sup>(2)</sup>、それでもなお、図書館の機能、特にその蔵書目録について活発な審議が行なわれたのである。

ミラッドの提訴を受けて立ち、特別委員会の設置に持ちこんだホズ議員は、32年の第1次選挙法改正による新設選挙区から初当選した新人議員で、ホイッグよりさらに進歩的な急進派所属の石鹼製造業者であった<sup>(3)</sup>。その意味で選挙法改正後の新興中産階級の政界進出の未だ数少ない典型のひとりであり<sup>(4)</sup>、その革新的意気は大衆的な人気を博していたという。ミラッドが自分の解雇問題を持ち込んだり、労働者階級出身のエドワード・エドワーズ (Edward Edwards) が詳細なBM改革案を当ホズに送付し<sup>(5)</sup>、エドワーズ自身が特別委員会の証人の1人として活躍する道を開くのも、当時の政界と一般民衆レヴェルの世論との具体的な関係を典型的に示している。

そして、こうした一般民衆レヴェルの期待をになうホズ議員こそ、分類目録に関する調査に最も熱心だったのである。

さて、この頃のBMの刊本蔵書目録の状態はどうであったろうか<sup>(6)</sup>。BM所蔵刊本の蔵書目録としては、1787年刊行のアルファベット排列目録 (alphabetical catalogue 以下、「著者名目録」とする)、パニッツィ入館当時の館長エリス、刊本部長バァバァの編により1813年から1819年にかけて刊行された7冊のオクタボ版著者名目録があった。目録刊行後に受入の図書は、後者の目録に白紙を挿入 (interleaf) し、この上に手書による目録記入が行なわれた。そのため、印刷されたページと手書によるページが混在し、時と共に膨張して分冊と製本が

何度も繰返され、34年時点で、当初の7冊は23冊に及んでいた。各記入ごとに手書きスリップを作成し、これを冊子に貼付する方法がとられるのは1849年以降である。

こうした印刷・手書混在の目録は、閲覧室と事務室に1セットずつ置かれていたが、手書部分が増加する上に、誤りが多く、特に閲覧室のものは過酷な利用によって使用の限界に達し、これに対する利用者の不満も増大していた。この間、1824年の理事会決定に基づいて、書誌学者ホルン (T.H. Horne) らを中心に、分類目録作成の作業が続けられていた。この分類目録作業が遅々として進まぬうちに、新収図書の増加、特にジョージ三世のコレクションを受入れたことによって (p. 22 右参照)、一方で継続して行なわれている著者名目録の維持は、事実上不可能となった。34年5月の理事会は、分類目録作成の作業を中止し、新たな著者名目録の作成を決定した。分類目録作成のために準備されていたスリップは新目録に転用されることになった<sup>(7)</sup>。新著者名目録の作業がパニッツィらを中心に開始された。

下院特別委員会は、分類目録中止の決定の未だほとぼりのさめないうちに開かれることになる。特別委員会で目録問題が大きく取上げられるのは当然の成行であった。

ホズ委員は、図書館の問題で喚問される1人1人の証人に対して、BMが分類目録と著者名目録の何れをとるべきかについて執拗に質問を重ねる。その質問は分類目録にとって有利な回答を引出そうとする意図が明らかだ。これに対して、たとえば外科医のサウス証人は、科学者として、一般研究者として、分類目録が著者名目録より便利であると答え<sup>(8)</sup>、弁護士マシッは、著者名目録は検索に労力と時間を要するから

不便である、分類目録こそ最も望ましい目録で、フランスをはじめ外国では当然のことだと答える<sup>(9)</sup>。刊本部長バァバァに対するホヰズ委員の質問は分類目録の有利さを引出そうと焦る余り、両者の間に激しい論争を展開する<sup>(10)</sup>。

バァバァは、分類目録は理論上は望ましいものであっても、閲覧者は実際には、著者名目録をより有用とみていると答える。

「BMの図書を調べる人は一般に調査を目的としております。かれらは自分が欲するものが何であるかを知っており、それより先が知りたい場合にかれらがとるでありましょう方法は、かれらが読んでいる著者が引用している参考文献に当たることであります<sup>(11)</sup>」。また、「大図書館において分類目録を作成することは大変なことでありまして、パニッツィなどはこれに参加するに足る十分な能力をもっていますが、なお誤りを犯さずに、これを行なうことは不可能であります<sup>(12)</sup>」と主張する。

パニッツィはスタンレイ委員の諸外国の目録の現状に関する質問に答えて、「目録に関するご質問こそ、およそ図書館についてなされる質問のうちで最重要のものであります」と前置した上で、前年の外国出張調査の結果に基づいて<sup>(13)</sup>、「一般に、図書館が何を所蔵しているかを知るために著者名目録を編成するための試みが常になされておりますが……実際にこれをもっているところは極めてわずかであります。……パリの王立〔後の国立〕図書館の基礎的な目録も著者名ではありません。そして、外国の図書館の著者名、分類いずれの目録も不完全であります」と答え<sup>(14)</sup>、「分類目録を作成することなど不可能事でありまして、理論上のことであります。……科学のみの分野の分類目録の歴史は40～50年経過して

おりますが、化学の分野の急速な発展のひとつの目録が完成するや、直ちに新目録に着手せねばなりません。分類目録を口にする人で、実際に分類目録を用いたことのある人はないのです。かれらが用いるのは、実はその目録の巻末の著者索引なのです」。また、「必要なのは、著者名目録に付せられる適切な件名索引 (subject index) であります<sup>(15)</sup>」と答える。これは件名索引を付した著者名目録の新しい構想でもあった。

バァバァ部長やパニッツィが展開した主張は、首尾一貫した著者名目録論であった。なるほど、パニッツィの調査の結果にみる限り、大陸の大図書館のほとんどは、印刷された著者名目録を持っていなかった。BM図書館には、すでに1787年と1819年刊行の印刷された著者名目録があった。この相違のゆえんは問わないにしても、BMには現に著者名目録の伝統があった。バァバァやパニッツィらの主張は、この伝統の基盤の上に立ち、過去の目録の欠陥を克服した、より正確・完全な新目録を目指していたのである。分類目録は理論的には望ましいとは考えられながらも、実践の問題としては、予測される不完全・不正確さの故に否定されねばならなかった。

一方、分類目録を主張した側はどうであったか。分類目録を主張する側の例として挙げた証人は、それぞれ医師と弁護士であった。2人とも専門職業家である。しかし学者ではない。かれらは必ずしもその道の専門書を利用するとは限らない。現に外科医サウスの関心は諸事万般に及んだという<sup>(16)</sup>、弁護士マンッは英国史の図書を盛んに利用したらしい<sup>(17)</sup>。かれらにとってのBMの利用は、おそらく研究者が行なうであろう書誌や専門書の引用文献を媒介とする特定の図書の利用だったのではなから

う。より広い教養としての読書や研究、あるいは特定分野での初学者としての利用であった。また外科医サウスの証言が示すように、当時の科学技術の急速な進歩は、すでに科学書の著者性を著しく失わせ、著者名目録による検索を不便にしていたのかも知れない。科学書の利用が必ずしも学者・研究者によるものでなく、実用的な目的で利用されることが多かつたらしいことは先に指摘した。

これらのことは、必ずしも専門研究を目的としない新しい層のBM利用者の多くが、分類目録を強く要求していたことを明らかに物語っていないだろうか。

分類目録に執着したホウズ議員は、ロンドンの私立小学校を出ただけで、代議士生活の初期には「分りもしない多くの問題に干渉して、笑いものになった」<sup>(18)</sup>という。おそらくかれの分類目録論は、かれ自らの経験によるものではあるまい。ミラードやエドワーズが、かれを仲介者としたように、かれの耳には一般大衆レベルでの多くの分類目録賛成論が入ってきていたであろう。かれはその意見の代弁者に過ぎなかったと思われる。

こうした推測に立つならば、BM図書館による分類目録計画の中止に対する批判は、かなりの範囲にわたって世論を形成していたことになる。BM図書館当事者、特にパニッツィの主張は、上にみた素朴な世論とはむしろ対立的なものであったというべきであろう。パニッツィの抱くBMの将来像は、あくまで「調査・研究のためのナショナル・ライブラリ」であり、「一般的な利用を目的とする公共図書館とは原理を異にして」いたのである<sup>(19)</sup>。

1835～36年の下院特別委員会は、36年7月14日、18項目よりなる調査報告を行なっ

て解散した。その第13項のみが目録問題に触れ、「完全・正確なる総目録の刊行を迅速に行なうこと」と勧告した<sup>(20)</sup>。目録が分類か著者名かいずれであるかは明確にされなかった。このことは目録の種類如何を問わず、その印刷刊行は急がねばならない点で委員会に意見の一致のあったことを強く印象づけるものであった。

#### 注

- (1) Miller, op. cit., p. 112.
- (2) Fagan, op. cit. Vol. 1, pp. 155, 255.
- (3) D.N.B. Vol. 25, p. 187.
- (4) 第一次選挙法改正以前と以後の下院議員の構成は、個々の新旧交代を除けば、大きな変化はなかった。地主階級が約50%、貴族33%、商工業者25%、という構成は1860年代まで余り変わらない(Guttsman, W.L. *The British political elite*. 1965. pp. 40-41)。しかし、このことは、政治過程に変化がなかったということでは決してない。
- (5) Miller, op. cit., p. 118.
- (6) 以下のBMの目録に関する概略については、Esdaile, B.M, p. 73 ff., Royal Comm. Report pp. 14-15, Miller, op. cit., p. 108, *British Museum general catalogue of printed books*. Vol. 1. 1965. preface. 等を参照。
- (7) この決定に至るまでに、理事会側小委員会とバァバァ、パニッツィ間に、新目録作成の方法・手順をめぐる意見の食違ひがあり、このことが著者名目録印刷の遅れの問題の大きな原因となる。この間の経緯については、Miller, op. cit., pp. 109-111.
- (8) Select Comm. 1836. qq. 1162, 1164.
- (9) Ibid., qq. 3381-82.
- (10) Ibid., q. 4540 ff.
- (11) Ibid., q. 4540.
- (12) Ibid., q. 4615.
- (13) パニッツィによる大陸各国の王立、大学図

書館の実態報告書は、Select Comm., 1836, App. 6. 特に各館の目録については、Ibid., pp. 546-547.

- (14) Ibid., qq. 4832-36.
- (15) Ibid., qq. 4855-58.
- (16) D.N.B., Vol. 53. p. 275.
- (17) Select Comm. 1836, q. 3381.
- (18) D.N.B., Vol. 25, p. 187.
- (19) Select Comm. 1836, q. 4794.
- (20) Ibid., Report, p. iv.

#### 4 著者名目録の刊行と中止

BM理事会は、著者名目録の印刷刊行を迅速に行なうことを決意した。しかしその任を担うはずの当のパニッツィは、著者名目録の必要は力説しても、それが印刷されることについて、積極的な意見を述べたことはなかったし、かれの理想とするところは、常に最新の状態を維持しうる手書目録と、これを補足する件名索引であった<sup>(1)</sup>。

パニッツィの刊本部長就任によって、理事会とパニッツィの間には、目録印刷に当たっての基本的な方法上の問題をめぐって、命令と反発の激しい応酬が再三にわたって行なわれることになった。合意がえられぬまま、理事会はついに、38年7月13日の決定をもって、パニッツィを中心に作られた91ヵ条目録規則を採択すると共に「1838年末現在の図書館所蔵刊本の目録が1844年12月31日までに印刷完成されるべきこと」<sup>(2)</sup>を命じた(本稿「資料・1」参照)。パニッツィにとって、この命令を履行することは絶望的な不可能事であった。しかし命令は履行されねばならない。

こうして、第1巻は、41年7月、ようやく刊行されたのであった。しかし、印刷の段階で、かねてパニッツィが予測したよう

な多くの誤りが明らかになっていた。また第1巻に記載すべきものが後から出てくることも多かった<sup>(3)</sup>。かれにとって、このまま後続の巻を印刷に付することは許されなかった。

理事会が命じた期限の1844年を過ぎても、全巻はおろか、第2巻も出なかった。

この間、理事会はパニッツィに対して、再三の督促と事態の報告を求める。本稿「資料・2-3」が、これに対するパニッツィの回答である。これらの回答のなかで、かれは年来の主張を繰返し強調するばかりである(「資料・2-3」参照)。これを要約すれば、目録の印刷は、全体の印刷準備が完了するまでは行なわれるべきでない、ということにつける。正確で、完全な内容を期する以上、早さは犠牲にされねばならない。

では、理事会の命ずる方法では何故、不完全、不正確が生ずるのであろうか。それは、第1に、タイトルの採集が書架ごとに(shelf-by-shelf)片っ端から実物に当りながら行なわれないこと<sup>(4)</sup>、第2に、多数の相互参照(cross reference)の必要にもかかわらず、部分を先に印刷してしまえば、後から出てくる参照を記入しえないからであった。こうした決定的欠陥を克服する方法は、原稿それ自体の完成を待って印刷に付する方法しかなかったのである。

すでにBMの外には、印刷の遅れを非難する声が高まっている。その責任は、パニッツィひとりに降りかかっている。かれは理事会に対して、この非難が不当で、誤解に基づいていることを弁護するよう要請する(「資料・3」)。しかし事態は変わらない。理事会の命じた期限を3年経過しても、第2巻は出ない。理事会の焦燥は大きい。残念ながら、われわれは当時の理事会

や、目録問題を担当した理事会の小委員会(sub-committee)の内部の空気を直接知りうる史料をもたない<sup>(6)</sup>。しかし、この小委員会に参加した館長エリスの影響は非常に大きかったという<sup>(6)</sup>。エリスこそ、パニッパと共に1819年刊の蔵書著者名目録を編じた本人であった。エリスは、この旧目録編纂の際に選んだ方法以外に、迅速に印刷が出来る方法はないと考えていた<sup>(7)</sup>。エリスにとって、パニッツィの主張する方法は全く受け容れ難い。その意味で、目録の印刷をめぐるパニッツィと理事会間の激しい争いは、実は、刊本部長と館長の間の争いであった。加えて、理事會事務局長フォォシャル(Forshall)は、理事會の決定をパニッツィに正しく伝えていなかった<sup>(8)</sup>。稿本部長マッデン(Madden)と、刊本部長との確執は半ば公然となっていた<sup>(9)</sup>。パニッツィの立場はまったく孤立状態にあったといわざるをえない。世論もまた、かれを支持しなかった。

目録刊行の遅れと、館内幹部間の確執は多くの人をして、BMに対する疑惑を抱かせていた<sup>(10)</sup>。発言力を増しつつある科学界にとって、BMは旧態、無能であった。英国科学振興協會(British Association for the Advancement of Science)その他の科学者団体は、47年3月の首相あての陳情書で、BM理事会に科学者の参加を要求する。下院では、BMについて内閣が何らかの調査を行なうことを要求する。古代学者ニコラス(N.H.Nicolas)とパニッツィの間には激しい論戦が展開されている。

世論はもはや、BM全体に向けられていた。こうした中で、内閣はついに、1847年6月、BMに対する王立調査委員会(後出)の委員を任命した。

なお、翌48年のことに属するが、48年4

月に選挙権の拡大を求めるチャァティストの大国会請願行進が行なわれようとした時、BM襲撃の噂が広がった。襲撃に備えて、BMにはバリケードが築かれ、小銃や投石用の石が用意された。これは単なる杞憂に終り、10日の大請願は平穩のうちに解散したが<sup>(11)</sup>、このような噂がもっともらしく広がったこと自体、すなわち、BMが労働者の運動の攻撃の対象となりうる可能性があったということは、BMが一般民衆からも激しい非難を浴びていたことを如実に物語るものであった。

さて、BMの外で展開されるさまざまな動きに対し、BMはもはや、目録の印刷問題について何らかの決断を迫られていた。パニッツィもまた、エリス館長に対して、BMにおける目録はいかにあるべきかという最も基本的な問題を提示するに至っていた。パニッツィはいう。「手書による良い目録が良いのか、印刷による悪い目録が良いのか、私には疑問はないと存じます。悪い目録は印刷されるべきではありません。それは流布されればされるほど、害を大にいたします」<sup>(12)</sup>。そして、「名誉あるナショナル・ライブラリーの目録がいかなるものであるべきかを理解している人にとって、刊行されるや嘲笑と輕蔑的となるような目録」を、理事會が選ぶべきか否かを問い直し<sup>(13)</sup>、エリスが編纂した旧目録の過誤を余すところなく指摘して、館長の反省を促した<sup>(14)</sup>。

エリスは、パニッツィの主張をついに認めたのであろうか。47年11月27日の理事會小委員会は、「刊本部長管理下の刊本の十分かつ完全な目録の編纂を、最も迅速に、手書によって行なうことをパニッツィ氏に命ずる。……1839年承認の規則〔91ヵ条規則〕に基づき、パニッツィ氏にとって最も

正確なりとみなされる方法により行なわれること」(傍点引用者)<sup>(15)</sup>との決議を採択。2週間後、理事会総会はこれを承認した。それは理事会にとって、誠に思いきった政策の転換であった。それは同時に、パニッツィ年来の主張の勝利であった。少くともBM内部での目録論争は終わった。目録の印刷は公式に中止された。第1巻の刊行以来、すでに6年を経過していたのである。

#### 注

- (1) Miller, op. cit., p. 139.
- (2) Ibid., p. 142. 当初この命令は、理事會事務局長フォォショナルによって内容が命令通りに伝えられなかった。このことが王立委員会でパニッツィによって明らかにされるや、委員会はパニッツィに対して深い同情を寄せたという。命令の誤った内容等については、Fagan, op. cit., Vol. 1. p. 259; Miller, op. cit., pp. 175-6; Royal Comm. qq. 2968, 2975. これら文献には、それぞれ微妙な食違いがあって事実関係の確認はできない。  
91ヵ条目録規則については、その訳文共に、高橋泰四郎「基本記入から見た目録規則の発展」『図書館研究シリーズ第7号』(1962) pp. 66-77 をみよ。
- (3) Miller, op. cit., p. 79.
- (4) この点は、具体的な作業手順や、技術的な問題を含んでいるので、本稿では立入らない。cf. Royal Comm. qq. 4207, 4210.
- (5) 当国立国会図書館で収集中の Irish Univ. Press 発行の British parl. papers. リプリント版には、王立委員會議事録に付されていたはずの、BM理事会提出の「付属文書 (Appendix)」が採録されていない。今後、何らかの形でこれが収集されることが望まれる。
- (6) Miller, op. cit., p. 140.
- (7) Ibid., p. 110. 旧オクタボ版目録は、エリスがA-FとP-Rを、バババがその他の部分を

担当した。パニッツィの方法は、全過程を指揮監督する責任者を1名設けて、不統一を防ごうとすることを目指した。

- (8) Royal Comm. qq. 2953-2983. 前注(2)参照。
- (9) Miller, op. cit., p. 172
- (10) 以下のBM外部の動向については、Miller, op. cit., pp. 170-172.
- (11) Fagan, op. cit., Vol. 1. pp. 281-283; Miller, op. cit., pp. 164-166.
- (12) A. Panizzi to Ellis, Oct. 2, 1846. in Royal Comm. App. pp. 290-291. cit. in Miller, op. cit., p. 144.
- (13) Royal Comm. App. pp. 298-319. cit. in Miller, op. cit., p. 145.
- (14) Royal Comm. App. p. 351. cit. in Miller, op. cit., p. 146.
- (15) Royal Comm. App. p. 446. cit. in Miller, op. cit., p. 147.

## 5 目録刊行中止の意味

1847年6月発足の「BMの組織・運営に関する王立委員会」(Royal Commission on the Constitution and Government of the BM)は、同年7月から49年6月までの間に、証人数51名、質問回数10,933回を行ない、その報告書と議事録は1,046 ページに達した<sup>(1)</sup>。調査の範囲は、BMに関するあらゆる問題に向けられたが、特に図書館の問題、とりわけ新著者名目録の刊行の遅れた原因が、「入念に調査され、かつ激しく非難された。」<sup>(2)</sup> つぎつぎに召喚されるBM幹部職員は詳細にわたって事情を聴取され、BM図書館の利用者が証人としてつぎつぎに登場した。

批評家として最高潮にあるカアライル証人はいう「自宅で参照しうるような目録が印刷されるべきである。……こうした目録が全英に配布されれば、研究者がロンドン

に上京した時、BMで閲覧できる図書をあらかじめ確認しておくことができる。BMにおける印刷目録の欠如は最大の弊害である。……精密さを云々するよりも、まず目録そのものが存在することが大事である」と<sup>(8)</sup>。BM閲覧室常連のシェイクスピア学者で、当王立委員会の事務局長コリア(Collier)証人は「必要なのは、簡潔にして分りやすい目録である。私の方法によれば、1時間に25〜30タイトルの目録をとることができる」<sup>(4)</sup>として、その見本を示してみせた。もちろん、外部の証人がすべてパニッツィを非難したわけではない。ロンドン大学教授で数学者のデ・モルガン(Augustus de Morgan)は全面的にパニッツィを支持する<sup>(5)</sup>。

すでに8回にわたって証人に立ったパニッツィは、49年5月、のべ9日間にわたって証言を行なった。それは王立委員会の事実上の審理を締めくくる圧倒的な証言であった。特にコリアが手本を示した簡易目録は、徹底的に批判された<sup>(6)</sup>。長い間の闘争と、個人攻撃の矢面に立たされてきたパニッツィは、委員会のすべての審理が終ったあと、「書物も、読み書きすることもいやになっております。とりわけ、この図書館と小生の立場に愛想をつかしております」<sup>(7)</sup>と嘆ぜざるをえなかった。持てる限りの情熱と熱弁を出し尽したあとの恐ろしいまでの虚脱の心境であった。

1850年3月28日に発表された王立委員会の最終報告は、パニッツィとその政策を全面的に肯定し、勇気づけるものであった。翌日のタイムズ紙は「この国家施設に大きな変化が起るに違いないことは明らかだ。今般提起された諸改革は、その内部行政の強化と公けの利益の増進に導くであろうことを信ずる」<sup>(8)</sup>と前置して、委員会報告の

内容を好意的に報じた。

報告書は、印刷目録をめぐる理事会とパニッツィの間の争いを実に鮮かに裁定した。「当委員会は印刷目録の中止に好意的意見を有することを強調しておく。理由は以下の通り。種類のいかに問わず、何らかの新目録を促進し完成させる過程で不満が訴えられた現実としての遅滞の原因の多くは、遅滞なく(原文イタリック)印刷目録の要請を満たさんがために、その行動を通じて、ごく最近に至るまで表明されたごとき理事会の願望に帰せられるものと、当委員会は判断するからである」<sup>(9)</sup>。言い換えれば、少しでも早く印刷目録を刊行したいという願いと行動が、実際にはかえって刊行を遅らせたということである。さらに続けて、「原稿完成後に印刷に付するという計画が実施され、かつ忍耐がなされていたならば、すでに目録は完成していたであろう。……当委員会は刊本の目録作業が、書架ごとに(shelf-by-shelf)片っ端から行なわれる方法によって今後とって代られることを勧告する」<sup>(10)</sup>と。この裁定は、年来のパニッツィの主張そのものではないか。

それはとりもなおさず、BM図書館の将来がパニッツィの理想のもとに実現されて行くことを意味した。かれにとって、目録の問題は単に技術の問題だけではなかった。便利さの道をとるか、正確さの道をとるか、BM図書館の将来の方向がかけられていたのである。世論は確かに、印刷目録を長らく待望した。カアライルやコリアの証言にも見られるように、時代は実用と便利を求めている。図書館の目録もまた、そのような対象として考えられ、簡便・実用的な目録が求められ、かつ速さが期待されたのである。鉄道の急速な発達、遠隔地からの来館を可能にし、公共図書館の運

動はすでに、活発な動きを見せていた<sup>(11)</sup>。公私の機関にBM図書館の目録がおかれることもまた、目録の印刷を社会的要請としていた。

パニッツィの思想と行動は、現実には、こうした時代の要請と対立するものであった。パニッツィにとって、便利と実用は、正確と完全の前に道を譲らねばならない。しかし、BMの外の世界にパニッツィの真意も、BM内部の論争の内容も伝えられていなかった。かれに集中される批難は、印刷の遅れに向けられるのみで、その理由は問われなかった。王立委員会こそ、この両者の対立が公開で激しく論議される、パニッツィに残された唯一の討論の場「法廷」<sup>(12)</sup>であった。かれはかねてから、理事会在自ら調査機関を設置することを要求していた<sup>(13)</sup>。王立委員会は、かれの望むところであった。パニッツィがこの法廷で弁明し、主張した内容はすでに各所にみた。そしてその結果は、委員会の最終報告にみるとおり、パニッツィの勝利であった。

功利主義と科学の進歩が生んだ実用の思想は、便利性を強調するあまり、当面の利用にしか堪えない目録を要求したのである。パニッツィの主張は、より長い展望と理想の上に立っていた。それは、かつて分類目録の問題をめぐる行なわれたパニッツィの主張と同じ原理に基づいていた。

目録問題に限らず、かれの残した多くの業績が、現代に至るまで有効であるということは、パニッツィの主張が単に世論との対立関係にあったというのではなく、まさにこれを超えた歴史の先取りであったというべきであろう。あるいは、BM図書館を超歴史的な存在とすることを意味した。王立委員会におけるパニッツィの勝利を契機として、BM図書館の発展をめぐる世論は、

逆にパニッツィによって指導されて行くであろう。かれはまさにその意味で、BMの第2の創設者となったのである。

## 注

- (1) 第2節、注(2)をみよ。
- (2) Royal Comm. Report. p. 15.
- (3) Royal Comm. qq. 4370-4379.
- (4) Ibid., q. 6261.
- (5) Ibid., q. 5757\*
- (6) Ibid., qq. 9788-9840; 高橋, 前掲論文 pp. 63-64 に副部長ジョオンズによるコリアの見本目録に対する批判文訳文所収。
- (7) パニッツィよりラザフアド夫人 (Mrs. Rutherford) 宛書簡, [49] 11.11. cit. in Miller. op. cit., p. 197.
- (8) *The Times*. Mar. 29, 1850. p. 7.
- (9) Royal Comm. Report. p. 16.
- (10) Ibid., Report. pp. 17-19.
- (11) 公共図書館に関する第1次の下院特別委員会は1849年に開かれ、50年からは、第2次の委員会が発足していた。公共図書館法 (Public Libraries Act)の成立は51年である。
- (12) Miller, op. cit., p. 173.
- (13) Ibid., p. 170.

## 6 パニッツィ勝利の政治的背景

しかし、かれの情熱と熱弁とその高い理想のみをもっては、激しい世論に対抗することはできなかったであろう。自らも、また、世論を形成する努力をなさねばならぬだろう。あるいは持てる政治力を発揮せねばならぬだろう。われわれはここで、極めて現実的な問題に引返さねばならない。

今、ひとつの推論を提示しておきたい。それは、「本稿『はじめに』」に紹介した国立国会図書館所蔵の『BM図書館刊本著者名目録』第1巻(以下、「当館本」)は、



BMから正式に出版されたそのままの姿の目録ではなく、その本体に、パニッツィによる秘密出版物が、何者かによって合冊されたものである」ということである<sup>(1)</sup>。

以下、この推論の根拠を列挙する。(1)当館本の背表紙は、書名表示の下に、“Panizzi's memoir on library British Museum”とあり、最下部に“London. 1841. 45”と2つの刊年表示のあること。(2)現BM所蔵目録によれば、当該目録は1841年版のみで他の版はないこと。(3)当館本巻末の付録部分“On the collection of printed books at the B.M., its increase and arrangement”(以下、“On the collection”)と同一タイトル、ページ数、大きさの出版物が自費出版物として、現BM目録に記載のあること。(4)当館本と同一内容の記述をもつ図書は現BM目録に見出せないこと。(5)当館本“On the collection”のタイトルの上に「非公開・秘」private and confidentialとあること。

では、“On the collection”が、なぜ秘密でなければならないのか。本書は3部と9つの付録文書とから成り(本稿「資料・2-3」は当付録F・G)、いずれも理事会に提出された文書である。本文部分は標題通りBMの蔵書の内容と欠点を具体的に叙述したもので、それ自体秘密にされる必要のものではない。とすれば、本稿「資料・2-3」として訳出した文書こそ、“On the collection”全体を「秘」とする性質のものであったのである。これは、理事会に対する回答を兼ねた抗議の書簡であって、公開されるべきものではなかったのだ。

“On the collection”の推定刊年は1845年だが、この年は、理事会が目録完成を命じた期限44年の翌年に当る。目録の刊行を遅らせている張本人とみられるパニッツィに対して、激しい批難が浴びせられている時

であった。パニッツィが、この時機にあえて自費で秘密出版し、恐らくこれを極めて限られた信頼度の高い人を対象に配布したであろうことは、かれ自身が、特に目録問題に関する自らの主張と行動に対する支持を求めようとしたからに他ならない。しかも、その支持は単なる同情的なものであってはならない。深く事態を理解し、かつそれを解決の方向に導くほどの見識と政治力と学識をもった人からの支持でなければならぬだろう。“On the collection”はこうした人々を対象とした宣伝・啓蒙の書であった。理事会に提出した資料や書簡そのものを提示したのは、そのためだったのだ。

では、この宣伝パンフレットが対象としたおそらく少数の人間とはどんな人であったか。この問題は、パニッツィの交友範囲と大きな関わりを持っている。残念ながら、この問題に深く立入るスペースをすでに持たない。本稿ではわずかな例証をもって将来の論証への手懸りとしたい。

先に、王立委員会の最終報告が、パニッツィ年来の主張を全面的に認めたことを見た。この報告書は、王立委員会委員長エルズミル伯爵(Francis L.-G. Ellesmere)によって起草された<sup>(2)</sup>。エルズミルはトオリイ自由主義派の前議員で大貴族。詩人、学者として、当時の知識層の代表者でもあった<sup>(3)</sup>。パニッツィは、かれの親しい友人の1人であった<sup>(4)</sup>。1848年時点での王立委員会委員14名のうち、少なくとも6人は、こうしたパニッツィの個人的友人であった<sup>(5)</sup>。特にラングデイル卿(H. Langdale)とラザフッド卿(A. Rutherford)は、元弁護士としてのパニッツィと法律学を通じての親友であり、それぞれ家族ぐるみの交友関係にあった<sup>(6)</sup>。また、王立委員会の設置そのものを決定し、委員の人選に当たったホイッグ

の第1次ラッセル(J. Russell)内閣にも、ラッセル自身をも含めて多くの友人達がいた<sup>(7)</sup>。パニッツィがラッセルらに対して委員の人選が、かれに有利になるように、何らかの工作を行なったとしても決して不思議ではない。

これらの理由から、王立委員会はその委員の構成にみる限り、当初からパニッツィにとって有利に展開される空気があったことが察せられる。しかし、私的交友関係が直ちに、BMの将来にかかわる重大問題を有利に導くとは限らない。むしろ、前節にみたように、パニッツィは自己の主張と行動を弁明し、主張しうる「法廷」の場を強く望んでいた。私的交友関係の有利さは、このような場を設定してもらう運動の過程にあったのだ。そして、その過程の中でこそ、先の秘密出版のパンフレットが用いられたのではなかろうか。

1867年の第2次選挙法改正までの19世紀イギリス政治には、未だ近代的な政党組織は成立するにいたっていなかった<sup>(8)</sup>。トォリィからホイッグへ、あるいはホイッグからトォリィに移り、また戻るといふ政治家は決して珍しくはないし、当然のことであった。議会勢力を両党の名のもとに分けることは容易ではない。それぞれの両極にある極端主義者を除けば、本質においては両党とも変りはなかった。トォリィがより保守的、貴族的で、ホイッグがより自由主義的、商工業的であるという比較の問題であるに過ぎない。当時の政治支配層は、むしろ人的関係によって結ばれていた。

この人的結合の舞台となり、その強化を促した大きな要因の一つに、ロンドンの社交界がある。大貴族を中心に、下級貴族、下院議員のみならず、資産家や芸術家、文人などが、大貴族の招待に応じて、政治・

社会・文化の諸問題を論じ合い、親交を深める。世襲貴族のような選挙地盤を持たない若手の政治家志望者は、この社交界を通じて、あるいはその文学活動を通じて、大貴族の後援と支持を受けて、下院議員へのパス・ポートを入手する。そして、この社交界の活躍の中心となるのが貴族夫人である<sup>(9)</sup>。

特に有名なのがホイッグの名門ホラント家(Hollands)のエリザベス夫人(Elizabeth Vassall Fox)で、ホラント家には、ホイッグのグレイ(G. Grey)、ランズダウン(H. Lansdowne)、ブルーム(H. Brougham)(p. 21 左参照)などの政治家、文人が多数集まっていた<sup>(10)</sup>。パニッツィは1833年ごろから、このグループの常客であった<sup>(11)</sup>。老グレンヴィル(T. Grenville)主催の夕食会には、上記のほか、エルズミル、サミュエル・ロジャーズ、マコッリ、グラドストーン等々当代の指導的政治家が顔を揃えた。パニッツィもまた、この家の大事な客であった<sup>(12)</sup>。すでに論述してきた過程で登場した、ブルーム、マコッリ、エルズミル等々が、ここに再びパニッツィと極めて接近した関係で登場したわけである。フェイガンのパニッツィの伝記は、これらの人々とパニッツィの交友録だといってもよい。

パニッツィの属したこうした社交界の政治家に共通したのは、大なり小なり功利主義思想の持主で、30年代以後の法律・社会改革運動の指導者であった。そしてパニッツィにとって何より重要なのは、かれらが新旧大陸における民族運動に共感を示していたことにあった。また、社交界の中心となった貴族の婦人達の間、イタリア文学特にルネサンス・イタリア文学が流行していたことである<sup>(13)</sup>。(p. 21 左参照)

オーストリアからの解放と、イタリアの

統一を夢見るパニッツィにとって、この社会はまさに適格的であった。しかも当時の政治家の多くは、みずから文学者であり、学者であった。知識に対する熱意は旺盛であった。BM刊本部長として、これもまた最も適格的な社会であった。

パニッツィに対する世論の批難が広がりつつあった時、自らの親交のグループの人びとに、BM図書館の現状と将来を語り、自己の立場を弁明するに足るパンフレットを秘かに配布することは、かれにとって極めて有効・適切な行為だったのである。

BM図書館の将来政策について、パニッツィの主張が勝利した背景に、19世紀前半の政治社会の風土が強く投影されていたといわねばならない。日本における初代帝国図書館長田中稲城と明治国家の政治との関係とは、際だった対照を示している<sup>(14)</sup>。

#### 注

- (1) この推論は、当館本がパニッツィ自身による45年時点での製本であり、このような形態で配布されたものの1部であるという推論を妨げるものではない。確認の限りではないが、むしろその可能性の方が強いと考える。
- (2) Miller, op. cit., p. 187.
- (3) D.N.B. Vol. 17. p. 153.
- (4) Miller, op. cit., p. 172.
- (5) Ibid., pp. 172-175.
- (6) Ibid., pp. 172, 226-7, 272, cf. 第5節注(7)
- (7) Ibid., p. 172.
- (8) 以下の政治関係の記述については、既出のBriggs; Beales; Guttmanなどのもののほか、特に横越英一『近代政党史研究』1960。村岡健次「イギリス自由主義の発達」(岩波講座『世界歴史』第19巻所収) 1971。
- (9) Guttman, op. cit., p. 159.
- (10) D.N.B. Vol. 20, pp. 115-117.

- (11) Fagan, op.cit., Vol. 1, p. 314.
- (12) Ibid., pp. 267-268.
- (13) Miller, op. cit., pp. 60-61.
- (14) 有泉貞夫「田中稲城と帝国図書館の設立」(『参考書誌研究』創刊号, 1970. 所収 pp. 2-19)。

#### むすび

近代合理主義は大陸で啓蒙主義を生み、経験主義はイギリスで功利主義を生んだ。パニッツィのなかに強いて思想的特徴をみるとすれば、それは啓蒙主義の思想であった。イタリア統一運動の思想はもとより、ルネサンス研究、BM図書館における行政上の合理的諸改革、功利的・実用的要請から来る分類目録の拒否、簡易・便宜を求めた印刷目録の拒否、主観の介入を飽くまで拒否しありのままの事実を正確に記述しようとした目録規則とその適用、中世美術への無理解、これらの特徴は、かれが啓蒙主義の持主であることを示している。

イギリス経験主義や功利主義とは異質の思想の持主は、しかし、異質的であるがゆえに、イギリス社会の中でその豊かな能力と行動力を十分に発揮しえたのである。19世紀イギリス功利主義の社会は、自らに不足し、かつ必要とするものを、異質的なものによって補完し、それを強化する可能性をもっていた。いくつかの困難な問題や、激しい対立をはらみながら、いや、それゆえに徹底的な討論と理解を経て、この補完作用は、おそらく世論のみによっては達成しえなかったようなBM図書館の将来をもたらした。いわば、BMはパニッツィによってアウフヘーベン(止揚)されたのである。

それは、BM図書館に超歴史的な存在機

能を与えた。そのことによって、BM図書館は後世の学術や研究に大きな役割を果たしたのだし、かつての栄光の立場を失ったとはいえ、イギリスが今なお、BM図書館を世界に誇りうるものとしているのである。

確かに19世紀中期のイギリス社会の歴史的諸条件がこれを可能にした。本稿は、これを目録作成という、社会全体からみれば誠に限られた一側面からしかとらえることができなかつたし、社会が大きく大衆化し、世論の要求も多様化した今日とはさまざまな事情も異なっている。その後、特に第2次大戦後に設立されたBM以外の諸種の国立図書館は、特に科学技術分野の機能を分化し、貸出機能を新設した<sup>(1)</sup>。しかし、BMのナショナル・ライブラリとしての本質的な使命は全く変わっていない。「全世界の図書館人や研究者は、他の情報源がない時に、BM図書館に頼り、…多数の学者が長期の調査を行なう国際的な学術センター」<sup>(2)</sup>として機能しているし、機能し続けることが期待されている。

すでに本論のなかで明らかなように、パニッツィはナショナル・ライブラリの本質の上に立って、常にBM図書館の将来への展望を見失わなかつた。そして、この巨視的展望ということこそ、現代のわれわれに最も必要とされ、パニッツィにその多くを学ぶべきものなのである。

#### 注

- (1) cf. Report of the National Libraries Committee. 1969. いわゆるデイントン (F. Dainton) 委員会報告。
- (2) Ibid., pp. 9-10. see also pp. 18, 72-75.

本稿の執筆に際して、館内の多くの方々

から、さまざまなご教示や激励を頂いた。個々のお名前を記すスペースはないが、厚く謝意を表したい。(熊田)

### 資料・1 BM図書館刊本著者名目録 第1巻 序文

本目録は、1839年7月13日の理事会によって承認された〔91ヵ条目録〕規則に基づいている。作業の進行を速めるために必要と思われた若干の変更を除けば、これら諸規則は厳密に守られている。作業を開始する時その必要がわからなかつたもので、いくつかのちに追加された規則は、イタリック体で印刷されている。

目録規則の適用は、1838年までに図書館が入手した刊本の目録を、1844年中に完了することを条件として、理事会により、編集者である私の裁量に任されている。引受けたこの任務の履行を考えると、一部分でも目録原稿の準備のでき次第、すぐに印刷にとりかかるということがどうしても必要と考えられた。それによって初めの方の巻は、記入漏れや不正確さを伴うことになるが、それは作業が進むにつれて少なくなるだろうと期待している。

他に類をみない膨大なものとなる目録の第1巻を世に出すのであるが、目録の有用性をますことになるであろう多くを当部職員の熱意と才能に負っているにもかかわらず、今各位の名を挙げて謝意を表するのは、尚早であろうと考えるものである。私はこの方々の協力が引き続き得られることを期待し、それゆえ、私の格別なる感謝の表明は、この目録が完了するときに譲りたい。

A. パニッツィ

1841年7月15日

資料・2 On the collection of printed books at the BM, Appendix F

1843年1月26日付パニッツィより  
理事会あての書簡

昨日、私（パニッツィ）（注）は、今日14日の理事会決議を拜受したが、それは新しい著者名目録（alphabetical catalogue）の作業の現状と進行状況について注意を促すものであった。それで私は、理事会の配慮を請う以下の表明を提出する次第である。

私はこれまで、1844年中に目録を完成することは不可能であるという確信を隠してきはしなかった。もしそれが可能であるなら、目録を完成するため能う限りのことを行なう用意はあるが、もしそれが不可能なら、できるだけ早くこの作業をうちきりたいというのが私の考えであった。誰もそれ以上のことは期待できない。

タイトル数を40万と推し測ってみても、しかもそれらが原稿として用意ができており、すぐに刊行される準備ができていて、あとは印刷業者に渡して校正するほか何の作業も残されていないとしても、1年10万タイトルの割合で——つまり1日に320タイトル以上、1週間に1,920タイトル（月曜日をのぞく）、1年に99,840タイトルの割合で——印刷に4年を要することになる。1日6時間何の障害もなしに、1年中それにとりかかるとして、1時間53タイトル以上のものを校閲しなくてはならない。しかも、目録の編集を監督しその実施に責任をもつ者は、最終的に印刷業者に原稿を渡す前に一度校訂し、またそのほかの作業も行なわなくてはならない。

しかしながら、タイトルは原稿にもそれに近いものにもなっていないし、その数は40万どころかその2倍以上になりそうである。充分考慮のうえ新しい総合著者名目録

の編集と印刷が決定され、企画が採択されてから、作業は正確に——決して完全に——というふうに理解されてはならないが——しかも可能な限りの速さで遂行されている。

目録の効用を損じないで、また私が従うよう指示されている目録規則の精神と本質部分に違背せず、しかも作業を少なくするための試みはこれまでにもなされてきた。

（中略）

全部の原稿ができるまでは、目録のどの部分も印刷してはならないというのが、私の意向であることを理事会は知っている。私は、私のあらゆる努力にもかかわらず、印刷が遅れば、第1巻はより多くの費用とより多くの時間を費し、より不正確でより不完全なものになるだろうと説得されてきた。けれども、すぐに印刷にとりかかれば、印刷される巻より漏れる莫大な量のタイトルを、図書館の印刷目録に追加記入しなくてはならなくなるので、それを維持するのに多くの費用がかかることになるだろうし、また同じ原因によって、続く各々の巻も同様に不完全なものになるだろう。例えば、ある作品の主記入が印刷部分より漏れたとすると、すべてのタイトルをあらかじめ訂正できないので、続く巻でそれへの相互参照は印刷できなくなる。他方、このように漏れたAではじまるすべてのタイトルへの相互参照も、同様にとり残されることになる。そしてのちにAの部の追加記入用の印刷目録にくりこまれなくてはならない。

これまでになされた作業に関して言えば、Bの部の正確な校閲済みタイトルはBezaまでしか進んでいないが、それ以上のタイトルが準備されていないと理事会が判断しないようお願いしたい。昨年のクリスマスまでにはほぼ16万タイトルが調査さ

れ、そのうち14万タイトルが新しい目録に入れられるだろうことを、すでに提出した報告によって御存知だろう。

(中略)

目録を能うる限り早く完成することは、このような仕事を監督する者として誇りであるし、避けえない遅れに対する責任から解放されるので、たとえ私が性格的にそうでないと思われるにしても、私の明らかな関心事である。私は、しかしながら、理事会の企画に従う限り、目録作成の進行を速める方法は2つしかないと考えている。この企画を採用したからには、それを厳密に、ゆるぎなく固守しなくてはならない。そうすれば、目録を、他のいかなる企画を補足するよりも、より信用できる形式で、より早く、より少い費用で完了しうらう。

提案する2つの方法のうちの第1は、助手の夏期中の作業を6時間とするのではなく、9時間に維持することである。それには私自身も参加できればうれしいと考えている。第2の方法は、フォォシャル (Forshall) 氏に話したように、見込がいたらもう一人の助手を任命することである。

理事会に対し願ひ出る以上の発言に加えて、遂行すべきでないこと、あるいは不可能なことを行なうよう圧力をかける人々たちに対し、私はいまだいくらかのことを申し上げたい。

目録に関して知ることが少なければ少ないほど、人はそれがとても容易な作業であると考えているようである。ブリティッシュ・ミュージアムにあるすべての古いタイトルをカードにとって、それらを30あるいは40の印刷業者に分配し、原稿をそのまま印刷して閲覧者に供する、このような作業を3ヵ月程度で完了することは疑いもなくやさしい

ことである。しかしこのような混乱した目録から益をうる者は一人もいないと私は確信する。このような目録は、これまで書かれたことも印刷されたこともない図書や、あるいは当該著者が書いたのではない図書があたかも存在するように人々に思わせることになるだろう。また、まったく同一の図書がふたつの異なる図書として受けとられることも起るだろう。さらに、このような未消化のタイトル群より漏れていたり、見つけだせない見出しのもとに隠れていたりして、実際には図書館にあるものがないことになってしまうこともあるだろう。世界に誤った情報を提供し、誤った指示を提供する作品を、故意にそれと知りつつ刊行することに、いったいいかなる正当な理由があるか。このような簡単な目録を出版するよう理事会に対し主張している人たちは、それが完了したときには、現在と同様、誤った情報を流すのに公共の費用を使ったといって理事会をうるさく攻撃するであろう。それゆえ立派な目録を出版するには、それに必要なだけの時間をかけねばならない。印刷目録の作成に大きな困難を認めている人たちは、それらの困難がどのようなものであるかを知らずに、しかるべき人数と手段が供給されれば、与えられた時間内に困難は克服されるだろうと考えている。かれらは、1人で1時間10タイトルを目録にとることができるとしているが、だからといって200人がその半分の時間で同様に立派で正しい目録を1,000タイトルとることはできないのだということはどうしても理解しえない。このように考える人々は、正しい決められた形式で、与えられた計画に従い、1日800,000タイトルの図書を準備し、印刷に付すことができると主張するにちがいない。しかし、物質的、人

的助力がたとえ無限に与えられるとしても、それは不可能である。このことが不可能であることがもし認められているのならば、どうしてこの問題に詳しくない人が、1日800,000タイトルの図書が準備され、印刷されうるなどと責任をもっていえるのか。そして、この仕事に要する期間を口にするのに、たいした根拠がないのならば、どうして、この仕事が1844年の終りまでとか、あるいはいついつまでに完成されるべきであると理事会に強いることができるのか。

(中略)

理事会は事柄を充分考慮して企画を採用し、また一方、担当職員が義務を怠っていないことを知っているの、図書館の限界を知ることに困難を覚えている。目録の完成をせまる人々は、これまで私が述べてきた考えについて論じたこともないし、かれらの到達した結論には根拠となる知識も材料もない。かれらは不可能ということ認めることができない。しかし、かれらが期待をかけるのは自由だし、また期待もしているだろうが、それは失望に終るに違いない。そして、そのあげく、意味もない批難をなげかけて人力を越えることをしないでいうだけで罪をきせるのだ。

(注) 原文は“Mr. Panizzi”を主語として語られているが、理解の便宜上、以下資料・2—3を通して、一人称で訳出する。

### 資料・3 On the collection of printed books at the BM, Appendix G

1844年6月27日パニッツィより理事会あての書簡

今月22日の理事会の命に従い、光栄にも私は以下のことを報告する次第である。

I 刊本の新しい著者名目録の作業の進行状況について。

理事会に提出している毎月の報告書により、理事諸氏は、タイトルがBuiretteまで校閲されたことを知っておられるだろう。そのほか、イギリス革命関係の小冊子類はMortimerまで校閲されている。さらに、Muratori, Ugolin Grævius, Purchase, Somers, the Harley Tracts等の著名な作品といった主要なコレクションの相互参照もなされている。

II 目録作業の全体のうち残された部分の割合について。

アルファベットの終りまで校閲されなくてはならないこととは別に、印刷業者に渡す前にタイトルを印刷用に準備しなくてはならない。20種類以上の言語より構成された膨大な量のタイトルについてのこの作業だけでも、種々の細かい事項——それらのうちのいくつかは、充分な情報と博覧の知識をもつ人にしかできないし、それらが軽く見すごされると、できあがった目録が大きな誤謬を伴うことになる——に対する注意と共に、かなりの時間を必要とする。目録を編集する者のこの部分の作業の実際上の困難をお見せする機会を理事会が与えてくれるよう私は望んでいる。印刷目録でも手書目録でもタイトルの整理は必須であるが、印刷目録のために整理する困難は、手書目録のために整理する困難より更に大きい。作業の終りには、できあがった印刷の校正もしなくてはならない。理事会が目録を印刷することをすでに決定したので、理事会がその決定を再考慮した方がよいと考えられるかも知れない理由を私はおしつけはしない。しかし、ありのままの事実——つまり、名前や日付や場所、本のサイズ、あらゆる言語で書かれあらゆる項目にわた

る作品の正しいタイトル——からなる、しかもそれらすべてが編集責任者の眼を一度は通らねばならない、そのような厚いフォリオ判で40巻にまでひろがりそうな作業の印刷の校正だけでも、何年もたたゆまぬ厳しい労働を必要とする作業であると申しあげておきたい。

Ⅲ 目録の成就を促進するために私が推薦する方法について。

私の考えでは、そのような方法はない。私は、理事会の命令を効果あるものならしめるために、私の考えるすべての方法を採用してきた。私はとりわけこのことについて質問が提出されることを望んでいる。そして、理事会が目録の遅れについて批難される時はいつでも、私のために、それに立ち向われることを乞いたい。私は、現在不満を述べている者に、不満を述べる根拠などなく、かれらの不満がたんに、この事柄に対し支払うべき当然の注意を怠っている

ためであると容易に説得しうると確信している。私は、理事会に対し、1843年1月26日に提出した報告に格別の注意を払ってくれるようお願いのものである。その報告によって、望ましい速さで作業が進むようにいかなる努力も惜まないできたこと、それ以上のことはできないことが明らかになると思う。迅速を口実として現在のシステムを離れるどのような試みも、新しい遅延の原因をつくりだすだろうし、測り知れぬ時間と金を浪費することになるだろう。

私は、測り知れぬという言葉を警告的に使っている。いかなる変更も、すでになされてきたことすべてをただちに無効にしないわけにはいかない。それはさらにより大きな害悪をももたらすだろう。

(安江)

(くまた・あつみ 法律政治課  
やすえ・あきお 一般参考課)

(61頁から続く)

世界の名著 第16 マキアヴェリ 会田雄次編 東京 中央公論社 昭和41(1966) 638p. 18cm (080-Se1228)

のうち、

君主論 マキアヴェリ著 池田廉訳 pp. 41—152

Sergio Bertelli 編Milano, Feltrinelli 1960年版全集のうち II Principe の翻訳。

政略論 マキアヴェリ著 永井三明訳 pp. 153—627

前掲 Bertelli 編全集のうち, Discorsi sopra la prima deca di Tito Livioより翻訳。

世界文学大系 第74 ルネサンス文学集 東京 筑摩書房 昭和39(1964) 429p.

23cm (908-Se1224)

のうち、

君主論 マキアヴェリ著 野上素一訳 pp. 59—109

Il Principeの翻訳。

君主論 マキアヴェリ著 大岩誠訳 東京 角川書店 昭和42(1967) 204p.

15cm (角川文庫) (311.7-cM14k-Ok) 昭和26年刊, 大岩訳の再録。

戦術論 ニッコロ・マキアヴェリ著 浜田幸策訳 東京 原書房 昭和45(1970) 308p. 20cm (A651-14)

F. Giusti 監 Operé di Niccolò Machiavelli, Milano, 1804—5, Vol. 10 I sette libri dell' arte della guerra より翻訳。

(48参レ612)